

七十六 「追記」は後日の追加された文章である。キリシタンに、死後の世界観が提示された。「煉獄」が熱く苦しい場所であると表現され、日本仏教の灼熱地獄の思想が融合されている。

#### 主要文献

田北耕也（校注）『天地始之事』、『キリシタン書・排耶書』一九七〇年、岩波書店、三八一〜四〇九頁。

#### 参考文献

- 遠藤周作「日本の泥沼の中で―かくれ切支丹考」『切支丹時代』一九七九年・一九九二年、小学館、一四四頁。
- 片岡照子「天地始之事―キリシタン土着化への一つの試み―」白百合女子大学研究紀要一九七五年、一一号、一三〜三二頁。
- 河合隼雄「日本人の宗教性とモノ」、『日常性のなかの宗教』一九九一年、南窓社、一八〜二九頁。
- 谷川健一「わたしの『天地始之事』」、『谷川健一著作集一〇』一九八六年・一九九五年、三一書房、一三五〜二四〇頁。
- 寺石悦章『『天地始之事』における場所のイメージ』四日市大学総合政策学部論集六、二〇〇七年、三七〜四七頁。
- 長谷川（間瀬）恵美「隠れ（Crypto）の信仰・生き方に学ぶ―キリスト教の実生化―」遠藤周作研究第四号、二〇一一年、（二）・（一六）頁。
- 「キリスト教の実生化―宗教と文化の出会いの一考察」、『日本の近代化とプロテスタンティズム』二〇一二年、教文館、一九五〜二二一頁。
- 松藤英恵「キリシタン書『天地始之事』第一節とキリシタン絵画『聖ミカエルの聖絵』に於けるルシフェルのイメージ」日本比較文学会二〇〇〇年、四三号、七〜二二頁。
- 宮崎賢太郎『『天地始之事』にみる潜伏キリシタンの救済観』宗教研究七〇号、一九九六年、七三〜九六頁。

五十一

西方ラテンのキリスト教神学において、イエスの十字架による死は、人間の「罪」の償いの行為（代償説）であり、この贖罪の教義は、救済論として位置づけられ、きわめて重要な教義として継承される（マルコによる福音書十章四五節）。

当時の外海地方のキリシタンの間では、貧しいがゆえに赤子の「間引き」が頻繁に行われていた。人々の罪意識は、イエスが日本の貧しい農民や漁民のための贖罪者であると納得させた

五十二

と解釈できる。

五十三

ロザリオの祈りの「悲しみの五玄義」第一図（ゲッセマネの園での祈り）に相当する。

五十四

ユダの裏切りについては以下を参照。マルコによる福音書十四章十節「わたしと一緒に鉢に食べ物を浸している者がそれだ」。

五十五

「マタイによる福音書二六章一四節」、ルカによる福音書二二章四三節。

五十六

十ダツ（ユダ）が食事をしてはならない断食の水曜日であるのに、掟を守らず普段通り食事を取っている様子から、悪心が募った様子がうかがい知れる。

五十七

キリストが「和尚」として表現されるのはこの箇所のみ。キリシタンの複雑な心理が仮託されている。

五十八

マタイによる福音書二七章三節。ユダが自殺した場所は、「血の畑」と言われている。

五十九

ローマ総督ポンテオ・ピラトの名前が二人の家老の名前として伝承されている。前編註三六参照。

六十

主イエスの寛大な慈悲の心が説かれ、同時に自殺者の霊だけは救済されないと強調される。これは、隠れキリシタンの間で教義化される。

六十一

イエスが捕まるのはエルサレムであり、ローマではない。地理の知識がないため、地名は間違つて伝承されている。

マタイによる福音書二七章二九節では、「茨で冠を編んで頭に載せ、また、右手に葦の棒を持たせて」と侮辱される様子が描かれている。

六十二

「三」は象徴的数字（シンボリック・ナンバー）。聖なる島、聖

六十三

三位一体の島と訳すこともできる。

六十四

十字架をつくる材料となったクロウスの木は宇宙樹（世界樹）の象徴だったと解釈される。

六十五

聖骸布をめぐるヴェロニカの話は、聖書には掲載されていない西洋の民間伝承。

六十六

前編九頁参照。この瘡子の話は聖書に掲載されていない。

六十七

受難の祈り。ロザリオの祈りの「悲しみの五玄義」を観想しつつ祈った。

六十八

盲人の眼を開く話は、マタイによる福音書九章二七節。しかし福音書では、信仰が二人の眼を開かせたとイエスは神の栄光の現れを説いた。ここでは曲解されている。

六十九

ヨハネによる福音書二〇章十二節「イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を着た二人の天使が見えた。一人は頭の方に、もう一人は足の方に座っていた。」

七十

イエスの昇天は、復活後の四〇日目であり、三日とは、死後復活までの日数である。日数の混入が見られる。

七十一

タ五カ条の復活の祈りは、「栄光の五玄義」にあたる。祈りの成立を祝う日とされる。

七十二

三位一体の教義の説明。しかし、御母マリアが聖霊の役目というのはキリシタン独自の誤解釈である。

七十三

キリシタンの間では、洗礼の際に、抱き親の洗礼名をもらう。イエスは、御身様、御主と呼ばれており、名前（イエズス）を得たのはこの時である。前編註二〇参照。

七十四

前編五頁の挿絵、外海地方に伝わる聖図「大天使ミカエルと槍で突かれた悪魔」参照。

七十五

黙示録においては数字の「七」が災いを意味する象徴的数字（シンボリック・ナンバー）として使用されている。

この教えが伝承されているキリシタンの間では、死者の火葬は許されなかった。

「お授け（洗礼）」の儀式（洗礼時に額に十字を指で記す）がキリシタンにとっていかに大切な宗教儀礼であり、その儀式における痕跡が大切な「救済」の基準とされていたか何える。

開国後、先祖代々の教えを守り通した隠れキリシタンたちは、待ち望んだ神父が戻ってきた後にカトリック教会に属する者たち、自分たちを守ってくれた仏教徒として生きる者たち、そして「はなれ」と別称で呼ばれながら先祖代々の教えを守り続ける者たち（カクレキリシタン）、三グループに分かれた。

宣教師が「奇怪な伝説を交えた、取るに足らないもの」として処分した物語『天地始之事』は、日本のキリスト教信徒が大切に守り伝えてきた信仰の書物であり、聖典である。異文化にキリスト教が実生化（インカルチュレーション）する形態を研究テーマにしている私にとって、『天地始之事』を現代語に訳すことは、日本人が独自の解釈を加えてキリスト教（一神教）を理解した過程を紹介する試みとなった。

現代語訳によって、より多くの若者たちが日本のキリシタンの信仰を感じ、異文化に土着し実生化したキリスト教についての考えを深める機縁（きつかけ）になることを願うものである。

## 注

四十三 「ばらん堂」は、ローマの四大聖堂バジリカ式建設聖堂の転化。「学匠等」は学問の師匠である仏僧「学匠等（がくじょうら）」が固有名詞化した。

四十四 ルカによる福音書二章四一節（神殿での少年イエス）。四六節「三日の後、イエスが神殿の境内で学者たちの真ん中に座り、話を聞いたり質問しておられるのを見つけた。」

四十五 挿絵「十五玄義図」参照。十五玄義図は民衆のキリスト教化の

ために描かれ、キリシタンが絵解き物語（ロザリオの祈り）として継承した。五つずつ「喜び」「悲しみ」「栄光」の玄義図が描かれている。朝の五カ条の祈りは「喜びの五玄義」…受胎告知、聖母の訪問、イエスの降誕、イエスの神殿奉獻、イエスの博士との議論まで。後出の「昼五カ条の受難の祈り」とは、「悲しみの五玄義」…ゲッセマネの園での祈り、イエスの鞭うち、荆冠、十字架の道、磔刑まで。「夕五カ条の復活の祈り」は、「栄光の五玄義」…キリストの復活、昇天、聖霊降臨、聖母の被昇天、聖母戴冠までである。キリシタンたちは、朝昼晩に分けて祈った。挿絵の十五玄義図は一九二〇年に、アナトール・ヒューゼ神父がヨーロッパから持参して黒崎のキリシタンに託したもの。オリジナルは第二次世界の時分に焼失された。この模写図は昭和二三年に長崎市立博物館に寄贈された。

四十六 ルカによる福音書二章四二節（神殿で学者たちと議論をする少年イエス）。少年イエスが「仏教徒」を相手とした宗教論争を行ったという解釈は当時の宣教師の宗論相手が仏教僧であったことを反映している。使徒言行録一七章一六節では、イエスの使徒パウロが、アテネでエピクロス派やストア派の幾人かの哲学者と討論したことが記されている。

四十七 ヨハネの黙示録一四章二十節を参照。千六百スタディオンは約七五里、三〇〇キロ。

四十八 マルコによる福音書三章十三節（十二人を選ぶ）。しかしイエスは一度に弟子を選び、洗礼を授けて使徒としたのではない。サンタ・エクレシアを訳すと「聖なる教会」となり、教会一般を指す。しかし、ここではローマのサン・ピエトロ大聖堂を表す（使徒ペテロの墓の上に建立されたカトリックの総本山）。サンは聖なるという意味だが、潜伏時代にキリシタンは「三」という数字で記し、象徴的数字（シンボリック・ナンバー）として伝承した。平たい石が「三ヘイトロ・平とろ（聖ペテロ）、丸い石は「三タマリア・丸や（聖マリヤ）」として使用されている。「死」を意味する「四」が象徴的数字（シンボリック・ナンバー）として提示され、皆殺しにされた幼児の数を誇張している。

られた者は、パウチズモ（洗礼）を受けていないため、天狗（悪魔）とともに地獄に落ちて封印される。ここに落ちた者は末代浮ばれない。右に選別された受洗者は、デウスのお供をして皆天国に入る。そして天国で善の多少によつて、それぞれが位を得る。<sup>七十五</sup>ここで仏となり、末世末代、自由自在になり、安樂の暮らしが出来るという、アンメイ・ゼズス（アーメン・イエズス）。

## 追記

ここに二人の仲むつまじい友がいた。その二人は、「君が私より先に死んだら、来世の事を細かく告げてくれよ。私が先に死んだら、三日の内に告げるから」と、互いに約束をした。ほどなくして、一人が死ぬと、残った方はとても悲しみ、天に叫び、地に伏して嘆き悲しんだが、その甲斐なく三日三晩過ぎ、友からの知らせを待った。

三年たったが、何の便りもなく、頼みの綱も切れ果てて、焦がれ死のうという時の、三年三ヶ月目に（死んだ友が自分に会いに）来た。友は、それはそれは喜んだ。「どうしてこんなに遅かったのですか」というと、「少しの暇もないのだ」という。その顔は変わり果て、あごの下に火がついているのを見て、どうしたことかと尋ねると「この火は、フルカトウリヤ（煉獄）の火だ」という。

それを聞いた、生き残った一人は「それならばその火を私に下さい。私の罪をこの世で焼きつくして二人でこの世を去りま

しょう」という。「いや、この火の熱さは、この世の火の十倍だ、なかなか堪え切れない」という。「大丈夫です。是非に。」というので、「それならば、望むままに」といつて有り合わせの枯れ木を積み立てて、その中に冥土の火を付けると炎がしきりに焼け昇り、たちまち体は焼け失せて、天に昇る道を得て、バライズ（天国）に行く人々に加わった。三トウス様（聖人）と申される方は、この一人の事である。もう一人の名は明らかでないので略す。<sup>七十六</sup>

## おわりに

以上が、長崎県西彼杵半島の隠れキリシタンが口伝継承した聖書物語である。日本のキリスト教史において、隠れキリシタンとその子孫たち（カクレキリシタン）が紡いできた歴史は忘れられてはならない。禁教・迫害時代（一六四〇年～一六四〇年）、検索・撲滅時代（一六四〇年～一六五八年）、潜伏・変容時代（一六五八年～一八七三年）というキリスト教弾圧の時代を通して日本のキリシタンたちは先祖の伝承した教えを、隠して守り続けてきた。彼らが必死で守るその教えが、宣教師や教えを導く者がいない中で、日本の土着の宗教である古神道や仏教、地方伝説等と融合してしまったことは避けがたい。当時、文字として残すことが危険であった『聖書』は、物語りとして口伝され、伝承として残された。そこには、当時の時代背景を反映する思想が鮮明に描写されている。



下黒崎町／枯松神社の手前の巨大岩。キリシタンが隠れて  
オラショを伝承した聖なる場所。

著者撮影

## 黙示録

この世界が減びるときは、太陽、大風、大雨、虫など、数々の怠慢が、七年の間絶え間なく続く<sup>七十三</sup>。そのため食物は不足し、人々が食べ物を奪い取りあい、共食いするようになる。  
その時に天狗（悪魔）が来て、マサンの悪の木の実を様々に変容させて（人々に）食べさせ、自分の手下にしようと企む。

取次を得てパライス（天国）の快楽を受けることが許される。

善悪の吟味・  
取り調べ役は、  
三パウロ（聖パ  
ウロ）。善のな  
い人は煉獄に通  
し、罪の度合い  
によって三時の  
間から三十三年  
まで問いただし、  
その後、三ジュ  
ワン（聖ジュア  
ン）の御改めに  
よって、お許し  
を受けてサント  
ウス（聖人）の

これを食べた人は、天狗（悪魔）の手下になって、皆、インヘルノ（地獄）に落ちることになる。

七年後、三年間は田畑や四方の山々は、豊作となり、大豊作遊覧の世となる。この時に、悪を棄てて善を行う者は、助けられる。

また、三年たつと、天と地が一度に和して、三ちり島のクロウス（十字架）の木が燃え尽きて、塩水は油となって燃え昇り、草木は火心のようになる。十二か所から火炎、焰がすさまじく昇る。これを見た畜類・鳥類、生きとし生けるものは人間に助けを求め、叫びをあげる。

次第に炎が焼け昇り、わずかな時間に、焼けつくされ滅びる。その焼け跡は一面の白砂となり、その時、聖人が、トロンの貝（法螺貝・トランペット）を吹くと、以前に死んだ人間、今焼け死んだ者が残らず現れ、デウスが量りなき御力で、人の魂を元の身体と合一し復活させてくださる。

この時に、行き惑う靈魂がある。それは、この世で最後の時に火葬された人の靈魂である。それは、末世まで迷って、浮かばれることはない。たとえ、土葬や水葬で、死骸を畜類や魚類に食われようと、焼け滅んでしまつていては元のようにはない。人間以外の万物も元に戻ることはない<sup>七十四</sup>。だから、ミイラの葉を飲んでほならない。

こうしてデウスは大いなる御威光・御威勢をもつて天から下り、道を踏みわけて、わずかな時間で、洗礼を受けた者の十字の痕跡をみつめて選別し、人を右と左に分けられる。左に分け



たちは、白衣の天使が御棺の上に立っているのを見て拝んだ。<sup>六十七</sup>（御主は）それから天に昇られ、三日目に御親デウスの右に座られた。<sup>六十八</sup>それから生きる人と死ぬ人（の霊）を助けるために、天から下り、三タ・エケレジャの寺にいらした。夕五カ条成立の祝いの日とは、この時のことである。<sup>六十九</sup>

第一弟子のペテロが、御功力の門まで（御主を）迎えに出られ、主は（三タ・エケレジャの寺に）四〇日間滞在されて、弟子たちに来世の救済について教えられた。そして、使徒たちに十日間説教され、五〇日目に昇天された。

御母丸やは、天からお告げを受け、七月三日にオリベテ山から御昇天された。

そして、天において御母丸やには御取次の役、御主には助手の役が与えられた。また、御親デウスはパアテル（父）、御主はヒイリヨ（子）、御母はスヘルト・サント（聖霊）と、デウスは三体となった。尤も、三体というのがデウスは一体であるということである。<sup>七</sup>

## 主の初救済

以前ヨロウテツ（ヘロデ）に殺されて、コロテル（エデンの園）に迷いこんでいた数万の幼子に、御主は名前を授けてパライズ（天）に引き上げられた。また、（御主の）御誕生の折の宿主をはじめ、三国の帝王三人、すべての弟子たち、麦作り、水汲みのベロウニカ（ヴェロニカ）、すべての人を天に上げられ、皆一

同がパライズ（天）に召し加えられた。

御母丸やは、デウスに向かつて「私は、処女の修行をしたので、自分自身を恋い慕って死んでしまいます。仮の夫としてどうぞルソンの国の帝王サンゼン・ゼジュズを助けてくださいませ」と願われたので、御助けによって（ルソンの国の帝王）と夫婦となり位を与えられ、御主はゼシウス（イエズス）と名命された。<sup>七十一</sup>

また、水汲みのヴェロニカは、アネイス・デウ（神の子羊）という位が授けられ、この世の不思議な力を守らせたもうた。

## 主、役割を与える

三ミギリ（大天使ミカエル）は天秤の役を授かり、ジュリシャレン堂（エルサレム・煉獄）で罪の事情を正して、善人はパライズ（天国）へ通し、悪人はインヘルノ（地獄）に落とし、また、罪に至った次第によって、罪を戒めていた。たとえ、善い心を持つ者でも天狗（悪魔）が天国入りを妨げることがある。三ミギリ（大天使ミカエル）は、それを咎めて、長剣で天狗（悪魔）を刺して、まず煉獄へ通した。<sup>七十二</sup>その時に充分後悔すれば、地獄に行くことは避けられた。

殺人を犯したり自殺した者は、煉獄から出された後、地獄に落とされ、末世まで助かることはない。気を付けるように。

天国の門番は、三ペイトロ（聖ペテロ）。ここでは、門を開けるオラショ（祈り）を唱えて通ること。

このことを四六人の御弟子が伝え悲しみ、様々な苦行や断食をして、死を怖がらずに（御主の）お供をしようと、あらゆる苦行がなされた。御主はこのことを察して、受難の祈りをつくられた。<sup>六十五</sup>

ヨロウテツ（ヘロデ）が「役人ども、早く息の根を止めよ」というので、役人らは、畏まって刀を手にとって働いたが、五体力が入らず、手足も思うようにならず、（御主を）突くことが出来なかった。

そこに盲人が来たので「おい、盲人、ここに死刑の道具がある。止めを刺すことができたら金をやろう」と言うと、盲人は「教えてくれば、止めを刺しましょう」と言う。警護の侍が、「これはこうして」と念頃に教えると、盲人は「了解した」と答え、教えられたとおりにグツと刺し貫いた。血潮が流れて、（血が）目に入ると、不思議にも両目が開いた。「奇妙なことだ、はてさて、この世界が明らかに見える。もうちよつと早く、悪人の留めを刺していればこの目が早く開いたというものを」と言った。このとき御主は「盲人には来生の救いは適うまい」と仰せになった。<sup>六十六</sup>

この盲人は、思うままに止めを刺して褒美の金を採り続けたので、眼はつぶれてたちまち元の様になった。金に目がくらむとは、こういうことを言う。左右の罪びとも同様に無常の煙と消え失せた。右の罪びとは忝くも、御主のお供として天に昇った。左の罪びとはイヌベルノ（インフェルノ・地獄）に沈んだ。

母サント丸やは、御主の死骸を御覧になつて嘆かれた。

帝王ヨロウデツ（ヘロデ）はこれを見て、「あそこで泣いている

女は何者か」と聞いた。「あれは、磔にされた御主の母であります」と取り次ぐと、帝王はそれを聞いて「なるほど、親子の別れであるか。名残惜しましてやれ」という。母は嬉しく思い、死骸に必死と抱きついて嘆かれた。警護の者は、御いたわしいが名残は尽きぬと、石の櫃に死骸を納め大地に埋めて、昼夜見張りの番をした。



カトリック黒崎教会 著者撮影

## 信条

セスタの日（金曜日）に御主は大地の底に下られて、サバトの日（土曜日）まで、大地の底にいらつしやつた。多くの弟子

に括りつけよ」と命じた。(捕手は)「畏まりました」と、言われた通りに括りつけ、「骨も砕けよ」と嘲笑すると、竹が微塵に砕けた。

(御主の)御口には苦いものや、辛いものなどが入れられ、御頭には金輪の冠が打ち込まされ、その体から流れる血潮は滝の水のようであった。<sup>六十一</sup>ヨロウテツ(ヘロデ)は、「数万の幼子たちを殺害させたのも、そ奴の所為であるのだから、三十三間の台に乗せ、カルワリヤウガ(ゴルゴダ)の嶽に、引きずり出して磔にせよ」と怒って言った。御主は強制的に連行された。

### 主、連行される

ここに三チリ島(サンクトゥスの島)という所があった。<sup>六十二</sup>ここにクロウス(十字架)の木という六十六メートルの高さの大木があった。この木の根元にデウスが天下り、火を付けると、その火は消えることなく永遠に燃え続くという。この木が焼けてしまうと、この世界はわずかな時間に、天火と地火が一度に和して焼き滅ばされるという。恐ろしや、なんとも恐れ多いことである。こうしたことから、根元の三十三メートルは(来る日のために)残して、上部の三十三メートルを切り取って磔の台を作り、御主に担がせて、カルワ竜ヶ嶽(ゴルゴダ)に連行した。<sup>六十三</sup>

(連行される)道で、ベロウニカ(ヴェロニカ)という水汲み女性に出会った。<sup>六十三</sup>彼女は御主を憐れに思い、「おいたわしい」と、

御主の血の汗を拭って、水を差し上げた。御主はそれを手にして悦んでお飲みになり「ありがたい、助けられた。」といった。(彼女の差し出した)手拭いに、御姿が映りだされたので、水汲みの女性は「もったいないこと」と思い、三タ・エケレジャの寺に納めた。

こうして、御主は、ゴルゴダに連行された。ここに死罪に処せられた罪びとが二人いた。中央に御主が御手足を大釘で討ち付けられ、その左右に二人の罪びとがからめつけられた。左の罪びとが、「今まで多くの仕置きをうけたが、このような酷い仕置きは初めてだ。これも皆、御前の所為だ」と御主に恨み言を言った。それを聞いた右の罪びとは「それは、そなたの心得ちがいだ。我々は大罪びとだが、御主は何の罪も犯していない。それなのに、このような仕置きを受けていらつしやる。御いたわしいかぎりだ」といった。

そもそも、この右の罪びとの出生を詳しく尋ねると、御主ご誕生の時、御主が使った産湯の残り湯をかけた瘡子であった。その時は、命が絶えるばかりの悪瘡が生じていたが、その湯をかけると不思議にも瘡が完治した。しかしその後、成長と共に悪心となり、遂に死罪に処せられることになった。御主の最後に、共に十字架にかかり、御供するということは因縁なことである。<sup>六十四</sup>

### 金に目がくらんだ盲人の話

カルワ竜ヶ嶽(ゴルゴダ)では、毎日のように拷問があった。



心が入り込んだ。(ユダは)師匠(御主)の事を探しているベレンの国(ベツレヘム)のヨロウテツ(ヘロデ)に訴え出て、褒

美の金を貰おうと企んだ。

御主は、(ユダの)心の中を悟り知ると、「この十二人の弟子の中に私の敵となる者がいる。」と言われた。<sup>五十三</sup>それを聞いた弟子たちは「そのような心を持つものは、一人もおりません」と口を揃えて言ったが、御主は、「毎朝、ご飯に汁をかけて食べる者が私の敵となる。」と仰せになった。

次第に悪心が募ったユダは、クワルタの日(水曜日、齋戒・断食の日)にいつもの通りに食事をして、ベツレヘムの国に急いだ。<sup>五十四</sup>帝王ヘロデに対面すると、「帝王様が、かねがねお探しになつてゐる御主は、ローマの国、三タ・エケレジャの寺の和尚です。はやく捕まえて死罪にしてください。」と訴えた。<sup>五十五</sup>ヘロデはそれを聞いて、とても喜び「褒美は臨むだけ与えよう」と言い、大金を渡した。

ユダは褒美の金を受け取つて帰る道すがら、容姿が変容し、鼻が高く、舌が長くなり、どうしたのかと思つたが、どうすることもできず、エケレジャの寺に戻つた。

他の弟子たちが集まつて、「その様、さてはユダ、お前が御主を訴えたのか、不屈き者め」と口々に戒めた。ユダは面目なくなり、寺の脇に金を棄てて、その森の茂みに入り、首をくくつて自殺をとげた。三タ・エケレジャの寺の脇に、金塚という場所が残つてゐる。<sup>五十六</sup>

## 主、捕えられる

こうして、ベレン(ベツレヘム)の国のヨロウテツ(ヘロデ)は御身(御主)を捕まえるため、家老のボンシヤとピラトに大軍を与え、ローマの国に派遣した。<sup>五十七</sup>そして、三タ・エケレジャの寺に着くと、「者ども逃すな」と指揮し、二重、三重にとりまいた。御主は少しも騒がれず、「ユダは何処にいるのか。」と問われた。弟子たちは「ユダは豹変したので、われらが戒めましたら、面目を失い、山中で自死しました」と答えた。それを聞いた御主は、「私は既に受難と死を覚悟しているのだから、訴え出ても自殺さえしなければ助けたのに。残念なことだ」とおつしやつた。<sup>五十八</sup>

(ユダが自殺した)山中では、奈落(地獄)の底から炎が燃え上がり、インヘルノ(地獄)の火炎のようになった。それは捕手の悪人らに、地獄を見せしめるためであつた。

捕手の者たちはこれを見て大層驚いたが、それでも御主の手を、恐れ多くも首から縄で嚴重に縛りあげ、ローマの国に引き立てた。それは、まるで羊に縄をかけて引きたてる様であつた。

御主は「速く歩け」と鞭打たれ、「愚鈍な奴」と棒で打たれ、無理無体に引き立てられてベレンの国(ベツレヘム)に連行された。<sup>五十九</sup>

間もなくして、帝王ヘロデの前に引き出された。(帝王は、御主を)見下して「捕手の者ども御苦勞であつた、その御主という奴は奇跡を演ずると聞くから、油断してはならない。その柱

デウスが、悪風を止めるために七十五里吹きま<sup>四十七</sup>した。

なるほど、と聴いていた仏僧や門弟十二人は、「私たちは学匠と呼称していましたが、そのような因縁を知りませんでした。今日からは御主の弟子にしてください」と言う。御主は「出来るだけ、あなたたちのお望みに従いましょう。」と言い、十二人に洗礼を授け、師弟の約束をなさ<sup>四十八</sup>つた。寺に来ていた群集の人々も、「我も我も」と洗礼を授かり、コンエソウル（聴罪司祭・司牧者）として仕えた。

（他の）仏僧等はこれを見て、自分達も弟子となつて（御主を）師匠として敬い奉ろうと考えたが、今までの經典が不要とされ、破棄されるとしたらどうなるのか、と思案し、「これは、一切経と言う大切な経文だ」と言い争い、お互いの議論が止ま<sup>五十一</sup>なかつた。そこで御主は「それでは、真偽を明らかにするために、この一冊（『聖書』）と、あなたたちの持つている数冊を比較してみま<sup>五十二</sup>しょう」と仰せになつた。重さを比較すると、経文数冊は軽く、『聖書』は殊の外重かつた。

これを見て、仏僧等の宗論は止み、洗礼を授かることを望んだ。仏僧等は「じきにヨロウテツ（ヘロデ）の追っ手がせまり、御主の探索が厳しくなるでしょうから、寺も、書物もこのままで、洗礼を授けて下さい」と願うので（御主は）、洗礼を授け、それからロウマ（ローマ）の国を目指して十二人の弟子と共に旅発<sup>五十三</sup>つた。

ローマの国に御主が到着すると、そこには金銀を散りばめた、辺りも輝くほどの御堂が建てられた。これが三タ・エケレジア

の寺（聖ペテロ大聖堂）である。そこで（御主は）この寺で人間の来生の救済を広めたとい<sup>四十九</sup>うことである。

### ヘロデ、国内を吟味する

帝王ヨロウテツ（ヘロデ）は空を駆け、土の中まで御主を捜索したが居場所が分からなかつた。そこで、庶民の子どもの中に紛れ込んでいるのだらうと思ひ、「国中の生まれ子、七歳までの子どもを皆殺しにせよ。」という御触れを出した。そして、四万四千四百四十四人の子どもが皆殺しにされた。<sup>五十</sup>惜しいとも、憐れとも、いずれにも例えようがない。このことを伝え聞いた御主は、数万の命が失われたのは皆、自分の所為であると考え、子どもたちの後生の助け（来世の救済）のために、ゼゼ丸や（ゲツセマニの森）で苦行をされた。

そこにデウスの声が下り、「数万の幼子が命を失つたのは、皆そなたの巻き添えである。幼子らがパライス（天国）の快樂を失うことは、心もとない。故に、死んだ幼子の来生のために、責め虐げられ命を苦しめて、死に臨むように」と命令された。<sup>五十一</sup>（御主は）ハツと平伏して、血の汗を流された。御主がこの時に唱えられたのが、屋五カ条の（受難の）祈りである。<sup>五十二</sup>

その後、御主は、ロウマ（ローマ）の国、三タ・エケレジアの寺に戻り、悪人に苦しめられて命を捧げようとお考えになつた。

さて、その頃、御弟子の中の十ダツ（ユダ）という者に、悪

長崎に伝承される聖書物語『天地始之事』（後編）

朝五力条の祈り

こうして十二年の間に、御母サンタ丸やは、あちらこちらにいる蜘蛛の糸を取り天の羽衣を織って、御身（御主）の着物を縫われた。

ばらん堂（聖堂）という所に学匠等（仏僧）という者がいた<sup>四十三</sup>

この人は、学問に秀れ、すべての経文を熟読されると聴き、（御主は）その人のもとで学問をしようとお考えになり、そこへ赴かれた。御母サンタ丸やは、三日三晩かけて（いなくなった御主を）探され、ばらん堂で見つけた<sup>四十四</sup>。朝五力条のお喜びのオラシヨ（祈り）とは、即ちこの時の祈りである<sup>四十五</sup>。



長崎歴史文化博物館蔵／出津のキリシタンが先祖代々宝物として保存した十五玄義図 嶋崎賢児撮影

仏僧は椅子に上がり「南無阿弥陀仏の六字の妙号を唱えれば、極楽に成仏することは疑いなし」と（話を）進めた。

それを聴いた御主が、「その妙号を唱えて、死後に行く先とは、どのようなところですか」と問うと、仏僧は「死後のことについては十分明らかでないが、弘誓の船に乗り、悪人は地獄に落ち、善人は極楽に行くということは、疑いない」と言う。

御主…「その極楽とは何処にあるのですか」

仏僧…「弘誓の船に乗れば、極楽世界に行くということは疑いない」

御主…「ただ疑いない、と言われてもわかりません。天地日月人

間万物はどのようにして出来たのですか、お聞かせ下さい」

仏僧…「私は未熟なので知らない。そなたはそれをご存知か」

御主…「それでは語っておきませしょう」<sup>四十六</sup>

（仏僧は）椅子から下りて、御主を上座に招いた。

御主は話し始めた。天の高さ、地の深さ、八万余り。「仏」と拝んでいるのは、天の御主、天帝（デウス）のこと、人間の死後の救いを成就される仏とはデウスのことです。この仏・デウスが天地日月を創られ、パライゾと言う極楽を創られ、人間万物、ありとあらゆるものは、この仏・デウスが思うままに創られました。また、人間を創られる際は、ご自分の四分の息を入れて成就されましたが、その後十分の溜息をつかれたために、それが悪風となつて、島に集まり、大風となつて敵となりました。その差が草木を吹き枯らし、人（種）が絶滅する前に、天から仏・

## 【研究ノート】

### 長崎に伝承される聖書物語『天地始之事』現代語試訳（後編）

長谷川（間瀬）恵美

キーワード カクレキリシタン、キリスト教、みしょうか実生化、インカルチュレーション、天地始之事

## はじめに

一八六五年に、浦上の潜伏キリシタン、ドミンゴ又一は、一冊のキリスト教の教理本をプチジャン神父（一八二九〜八四）に手渡した。そこには、約二五〇年にわたる潜伏期間に長崎の隠れキリシタンが、口伝継承した神話、旧約・新約聖書物語（天地創造から楽園追放、マリアの処女懐妊、イエスの生涯、最後の審判、および黙示録までの内容）が描かれてあり、表題には「天地始之事」と記されてあった。（前編はじめにより）

本稿（後編）は、イエス（御主）の生後から始める。失踪したイエスを探す母マリアはイエスを寺で見つける。イエスは寺の坊主と問答しており、後に彼らは弟子となる。イエスを追跡する帝王ヨロウテツ（ヘロデ）と皆殺しにされた子どもたちのために苦行をするイエス、当時の宗教社会における神仏習合の影響、裏切った弟子の十ダツ（ユダ）の自死を悔やむ救済者の姿、磔刑、死後の役割。前編に続き、現代語訳を試みる

## 目次

- ① 天地の始まり
- ② 悪の実、中天に追いやられる
- ③ 神、人類救済のために分身を世に送る
- ④ ルソン国の帝王の死
- ⑤ サンタマリアの受難
- （後編）
- ⑥ 朝五カ条の祈り
- ⑦ ヘロデ、国内を吟味する
- ⑧ 主、捕えられる
- ⑨ 主、連行される
- ⑩ 金に目がくらんだ盲人の話
- ⑪ 信条
- ⑫ 主の初救済
- ⑬ 主、役割を与える
- ⑭ 黙示録
- ⑮ 追記
- おわりに